

新版 高等学校『美術3』教科書のご案内

平成31年度版『美術3』の巻頭には、浅井裕介さんがインドの村の学校で制作した壁画「誕生日の森―父の木、母の山」を掲載しています。村の土を使い、子どもたちと共同で行った壁画制作プロジェクトは、教育に対する関心の低い村の人々が学校に目を向けるきっかけをつくりました。

『美術3』のテーマは、美術で学んだことを他者へ、社会へ、つなげていくこと。社会で生かされている美術の力に生徒が気づけるよう、芸術祭やオリンピックを題材として取り上げています。

また、巻末では6ページにわたって美術で学んだことが生きるさまざまな職業を紹介。メディアアーティストやブックデザイナー、アニメーターなど、その仕事に携わる9人のインタビューを掲載し、社会へ踏み出す生徒たちを応援しています。



アトリエでインタビューに答える浅井裕介さん。
光村図書ウェブサイト「美術のはなし」では、この映像をご覧いただけます。



新版『美術3』(P2-3)
浅井裕介「誕生日の森―父の木、母の山」
ウォールアートフェスティバル2014(インド)での展示。



新版『美術3』
38光村 美術 303

教科書訂正のお知らせ

平成30年度用中学校『美術2・3』教科書では、平成29年度用から下記の箇所を訂正いたします。校内の先生方でご確認のうえ、ご指導の際には、十分ご留意くださいますようお願い申し上げます。

ページ	行など	29年度	30年度
51	キャプション 3行目	2006年 きとうこういち 佐藤晃一 [1944～群馬県出身]	2006年 きとうこういち 佐藤晃一 [1944～2016 群馬県出身]
51	キャプション 2行目	2010年 ながともけいすけ 長友啓典 [1939～ 大阪府出身] イラストレーション:黒田征太郎	2010年 ながともけいすけ 長友啓典 [1939～2017 大阪府出身] イラストレーション:黒田征太郎
98	キャプション 3行目	①◎土偶 じょうもん 「縄文の ヴィナス」	①◎土偶 じょうもん 「縄文の ビーナス」

美術準備室 No.13

2018 (平成30)年6月21日

発行人 ■小泉 茂
発行所 ■光村図書出版株式会社
〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
電話: 03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp
E-mail: koho@mitsumura-tosho.co.jp
デザイン ■Better Days
(大久保裕文+深山貴世)
印刷所 ■株式会社 加藤文明社



光村図書

2018

美術準備室

つ く る ・ み る ・ 感 じ と る

第 13 号

光村図書

アトリエ訪問
画家

浅井裕介

作家の肖像
日本画家

高山辰雄

放課後ART

●兵庫県南あわじ市立

南淡中学校

●TECHTILE

ワークショップ

この1点

「ブロードウェイ・

ブギウギ」

布施英利

特集

鑑賞から主題を生み出す

北海道教育大学附属釧路中学校

内容解説資料

本誌は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、(一社)教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のによって配布しております。



ア ト リ エ
訪 問

第 13 回

浅井裕介

画家

植物や動物がリズムカルに連なり、
まるで一つの大きな生命体であるかのように躍動する。
浅井裕介の作品には、生命力があふれている。
国内外のさまざまなアートプロジェクトでは、
現地に赴いて作品制作をすることでも知られる
彼のアトリエを訪ねた。

撮影 永野雅子



ダイナミックな絵を生む道具たちは、いつでも手に取れるよう床の上に。



各地で集めた土。赤みがかったものから、モスグリーンに近いものまで、その色彩は豊か。



土や絵の具を使って描いたドローイング。旅先で、その場所の土だけを使って描くことも。

東京都心にほど近い住宅街にある古いビルの一室。扉を開くと、大きな窓から燦々と光が差し込んでくる。この部屋の一角に設けられたスペースが、画家・浅井裕介のアトリエだ。壁画をはじめとした大きな作品の制作で知られる彼は、このアトリエでどのように作品と向き合っているのだろうか。

——窓から見える景色が開けていて、とても気持ちがいいですね。

浅井 空を見るのが好きだから、この眺めのよさは気に入っています。日によっては、富士山も見えるんですよ。

ここは住居も兼ねているので、リビングの一角に自分で板を立てて、アトリエスペースをつくりました。僕はけっこう、大きな絵を描く人だ

と思われているみたいですが、アトリエでは小さな絵が描ければいいと思っています。一つの絵を描いた上からまた描いてというのを繰り返していたりします。2年たってもまだ描き続けているものもある。

——じっくりと制作されるんですね。

浅井 完成させなきゃっていう気持ちはそこまでないんです。ただ、描くことで、「これまで見たことのないものが見える場所」に行けるときがあって、その術^{すべ}を見つけるのがおもしろくて描いています。そして、そういうものが描けたら、忘れないように取っておく。作品の種づくりみたいなものですね。

知らない場所に行って大きな絵を描くことも、たぶんこの延長線上にある。そこでは、アトリエでつくった種をまいて、ぼんぼん発芽させて

いくみたいな感じで描いています。

——浅井さんの作品には、土と水を使って描く「泥絵」がありますが、土を画材にしようと思われたのは、なぜなのでしょう。

浅井 僕はたぶん、自分が何かをコントロールするよりも、何かから受け取ったものを、自分を媒介にして外に出すほうが得意なんです。だから、自分がコントロールしきれないようなものを使って描きたいという思いがあって。

2008年にインドネシアで作品制作をしたときに、「日本から持ち込ん



「どんな場所にも、そこで生まれてくるべき形があるはず。」

今年、フィンランドで民族叙事詩を題材にした作品を制作したことで、各地の神話にも興味が芽生えた。

だ画材ではなくて、この土地にあるものを使いたい」と思って選んだのが土でした。インドネシアという国にすごく生命力を感じて、それを支えている土を使ってみようと。実際、使ってすぐに、自分と相性がいいことがわかった。——土って、実は色彩豊かなのですね。

浅井 土は、やっぱり場所によってぜんぜん違いますね。僕は、その場所で生まれる生命力みたいなものに興味があるんです。どんな場所にも、そこで生まれてくるべき形があるはずだ、と。前にインドの小学校の教室で描いた壁画の中に、逆さまの顔の絵があるんですが、あれは当初、逆さまに描くつもりじゃなかった。でも鼻を描くときに、どうしても手が上に動いて、逆さまになったんです。まるで、それがあべき形であつたかのように。

そんなふうに場所と自分とがぶつかって、描きたいものが裏切られるときには、すごく興奮します。それは、自分が「こだわり」だと思っていたものが、ただの「とらわれ」なんじゃないかって揺らぐ瞬間でもあ

るから。「とらわれ」では、いいものではないんです。

相性って大事で、いまだに土には飽きません。最近、絵の具に土を混ぜて描いたりもしています。陶芸にも興味があるし、今後は、そうやって土の力をもう少し拡張していくことも試してみたいと思っています。

あさい・ゆうすけ 1981年東京都生まれ。マスキングテープとペンを自在に操って植物を描く「マスキングプラント」現地で採取した土と水を使用して動物や植物を描く「泥絵」のシリーズなど、屋内外のさまざまな場所に、身近な素材を用いて作品を制作。「VOCA展2009 大原美術館賞」受賞。近年の主な個展に、彫刻の森美術館での「浅井裕介—絵の種 土の旅」(2015-2016年)。